

Title	表紙 目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.4 (1956. 4)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19560401--001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌

慶應義塾經濟學會

四月號

經濟學關係文獻目錄

書評及び紹介

「賃労働」問題の分析視角……井村喜代子(二四)

D・リカードの

ケインズ『一般理論』……遊部久藏(二)

價值論からみた

論説

第四十九卷

第四號

昭和二十六年三月二十四日第三種郵便物認可
 三田學會雜誌
 昭和三十一年三月號

三田學會雜誌

昭和三十一年三月號

定價 金七〇圓

(八頁)

MITA GAKKAI ZASSHI

(Mita Journal of Economics)

Vol. 49, No. 3

March, 1956

CONTENTS

Linear Programming: The Duality Theorem.....	<i>M. Fukuoaka</i>	(1)
Economic Planning and Utilization of the Law of Value.....	<i>H. Kato</i>	(11)
Prof. Duesenberry on the Theory of Investment	<i>I. Okuma</i>	(25)

Contributed specially

On the Discovery of Andō Shōeki's Native Place and Relatives	<i>D. Watanabe</i>	(35)
Japanese Economic Thought	<i>M. Bronfenbrenner</i>	(1-10)
—A Foreigner's-Eye View—		

Reviews and Notes

Published for
KEIO-GIJUKU KEIZAI GAKKAI

(The Keio Economic Society)
 Editorial communications to be sent to
 the Editor, Keio-Gijuku Keizai Gakkai,
 Keio-Gijuku University,
 Mita, Minato-ku, Tokyo, Japan
 Price 70 yen

書評及び紹介

田中惣五郎著『幸徳秋水——革命家の思想と生涯』……………飯田鼎(三)

山極圭司著『木下尚江——先覺者の闘いと悩み』……………大島通義(四)

武田隆夫・遠藤 湘吉・大内力著『近代財政の理論』……………寺尾誠(五)

プレハローノフ著『歴史における個人の役割』……………加藤寛(五)

西牟田久雄・直野敦譯『ハーサナイイ』……………古田精司(五)

U・K・ヒックス著『英國財政、その構造と發展、一八八〇年—一九五二年』……………井村喜代子(六)

W・S・ヴォロディン『ケインズ——獨占資本のイデオログ』……………

價值論からみたケインズ『一般理論』

遊部久藏

近代經濟學はしばしば價值論なき經濟學であるといわれている。もちろんオーストリア學派においては、勞働價值説に對抗する主觀的な效用價值説が存するのであるが、一般均衡理論を根幹とするローザンヌ學派においては事實上また實際上、勞働價值説も效用價值説もふくめて一般に價值論は否定されることとなつた。イギリス經濟學の傳統に立脚するといわれるケムブリッジ學派においてはどうかであるうか。このことを私たちはケムブリッジ學派の發展形態としてのケインズ學派についてみようとするものであるが、さしあたり、ケインズの『雇傭、利子および貨幣の一般理論』を検討の對象とする。但しこの小稿においては主として價值尺度論の觀點から、ケインズの勞働單位論が考察の對象とされ、價值の實體の問題についてはおわりに附隨的に論及されるにすぎない。じつはこの最後の問題を手懸りとして、生産物價值の分割や、剩餘價值の起源や、物價水準の決定の問題にまですすむ豫定であつたが、枚數の關係上、これらの問題については、他の機會にゆづることとする。

結論を豫示すれば、『一般理論』においてはイギリス古典派經濟

價值論からみたケインズ『一般理論』

學の最高の成果である勞働價值説は單なる連想として存在するにすぎない、その實質はもはや存在しない。むしろ全體の論理構造からみれば、それは主觀的價值論の系譜にづらなるものである。私たちはマックラケンがマルサスのうちにオーストリア學派へのみちを見出した^(註1)と同じような意味で、オーストリア學派からケインズへのみちをたどることが可能であると思う。このことの解明も私たちの將來の課題となるであろう。

(註1) H. L. McCracken; Value Theory and Business Cycles. 1933. p. 14, 135.

經濟現象はさまざまな量的關係としてあらわれる。したがつて量的關係を正確にあらわす單位の決定ということが重要な課題となる。ケインズ自身つぎのようにのべている。「いふまでもなく、われわれの數量的分析は、いかなるものにもせよ數量的に曖昧な表現を